

常勤聞きて、さらば罷り下り候べしとて、やがて、秋田に下りける。急ぐに程なく湊の城に着きしかば、案内こうて内に入り、愛季公に對面あり。助殿御覽じて、珍しや常勤、此方へ参れ、と仰せける。

四方の御物語も過ぎければ、常勤、先年、浦落城の様子尋ねければ、助殿聞こし召され、盛長は九郎と一味仕り謀叛を企て候故、追罰致せしなり、と仰せける。その時、常勤申し上げけるは、内々、九郎殿反逆の由聞き及びて候、兵庫守は謀叛の儀ゆめゆめもつてこれなく候、それをいかに、と申すに、盛長先年甲州より下着の砌、太郎殿より浦の城、三百町給わりければ、義をもつて命を捨つるは武士の習いなり、太郎殿の御息なれば、九郎殿に相隨う人々は賢人なり、と皆人沙汰仕り候、と申されける。助殿聞き給い、貴方の申さるる通り尤に存ずるなり、不忠の者といひながら惜しき侍なり、さりながら盛長が子供ある由その聞こえあり、折柄あらば召し出し、本領相違なく父が跡を立つべし、と仰せける。

常勤、時分よしと心得、申し上げるは、されば兵庫守が一子五郎こそ某宅に罷りある、召し出され候えかし、と謹みて申し上げる。助殿、事急なり、と思し召され候えども、一度仰せ出されたる事なれば、是非に及ばずと思し召し、さらば召し返し候べし、とやがて戸嶋孫七を御使にて酒田へこそは遣つかわされける。

急ぐに程なく酒田に着き、人々に對面し右のあらまし宣いければ、人々喜悦限り無く御使と諸共に湊をさして下らるる。

湊へ着けば、戸嶋孫七、御前に畏り三浦五郎罷り下り候、と申すもあえず、助殿、それこなたへと仰せける。孫七やがて五郎を伴い御前に罷り出、謹みて畏る。君、御覽じて天晴兵庫守が子程あり、永々の浪人定めて難儀しつづらん、本領なれば三百町浦の城を指し添えて下され、よくよく成敗仕れ、と仰せ下され候えば、五郎、ありがたし謹みて畏る。さりながら某、無器量の者なれば、浦の城は延引に存じ奉るなり、願わくは、並びの所、押切と申すに罷り在りたく候、と謹みて申し上げる。君聞こし召し、ともかくも望むべしと則ち御盃を下されける。五郎頂戴し、時の面目世の聞こえありがたしありがたし、と御前を罷り立ち、やがて押切に御所を立て居住あるこそめでたけれ。

さてまた、石頭院と申すは、御父盛長御腹召され候時、御供なされ候いける、殊に御先祖の牌所はいじよなれば、先年の例を引き石頭院、一日市へ移し奉られける。その後、松前より武田の御息女迎え取りめでたく栄え給いける。

それより御家の侍ども尋ね出され、それぞれに知行賜り、左衛門尉は申すに及ばず、小和田甲斐守・長谷部隼人・一子隼人之助・二男隼友・大内越前守、何れも日夜の出仕隙ひまもなし。